

幼児の動物の死の概念と、 ペットロス経験後の生命観の変化に関する研究 (中間報告)

ヤマザキ動物看護短期大学 濱野 佐代子

Studies on Young Children's Concept of Death of Pet and on the Changes in the View of Life after Experiencing Pet-Loss. (Progress report)

Yamazaki College of Animal Health Technology HAMANO Sayoko

近年核家族化が進み、子ども達が家庭内で近親者の死を経験することがほとんどなくなってきた。しかし、子ども達が親密な対象の死を経験することは、死を理解するためや、生命の大切さを実感するための重要な経験であると考えられる。そこで本研究では、幼児のペットロス経験を調査することにより、動物の死の捉え方とペットロス経験による人格的発達について探索的に検討することを目的とした。

この中間報告では、本研究の予備調査として、幼児を対象とした動物の死に関する面接調査と、ペットロス経験者を対象とした質問紙調査を分析することにより、本調査の質問項目を作成することを目的とした。結果、幼児の面接調査では、死の場面状況、そのときの感情、死の原因、死後の推測についての語りが見出された。また、質問紙調査では、ペットロス経験による人格的発達に関する項目が抽出された。

今後、以上の結果を基に本調査を実施する。

【キー・ワード】 幼児、ペットロス、死の概念、人格的発達

As the trend of nuclear families is increasing in these years, children rarely experience the death of a close relative. However, it is believed that experiencing the death of a close relative could be an important experience for children to understand the death and to realize the value of life. The purpose of this research is to study understanding of the death of animal and the personality development by investigating young children who have experienced the pet-loss.

In this progress report, the purpose is to prepare the study for the main investigation by interviewing with the young children about the death of pet and analyzing the questionnaire from people who have experienced pet-loss. As a result, the circumstance of the death, the emotion at the time, the reason of the death and the imagination of afterworld were observed in the interviews with young children. Also, items related to the personality development were

gained from the questionnaire of the pet-loss experience.

The main research will be developed based on the above results.

【Key words】 Young children, Pet-loss, Concept of death, Personality development

問 題

近年核家族化が進み、子ども達が家庭内で近親者の死を経験することがほとんどなくなってきた。また、終末期を病院で迎える人が多く、子ども達が死に立ち会うことも少なくなってきた。しかし、子ども達が親しい者の死を経験することは、死を理解するためや、生命の大切さを実感するための重要な経験であると考えられる。

一方、現在家庭内で飼育されているペットの多くは、単なる動物ではなく家族の一員として飼育されている（濱野，2003）。このような時代背景の中、家庭内で子ども達と親密に関わっているペットロスについて調査することは、親密な対象の死の経験を扱うこととなる。ペットロスとは、愛着対象であるペットの喪失と、それに伴う諸反応の悲哀のことである。ここでペットを対象とした理由は、近親者の死よりも多く遭遇すると考えられ、幼児が親近感を抱いているペットを対象とすることにより、死を身近に起こった出来事として捉えるため想起しやすいと考えられるためである。

最近の喪失研究では、死別経験によるストレスフルな経験が人に及ぼす影響の中で、ポジティブな側面を扱う Stress Related Growth (Park, 1996; Calhoun, 1999), Posttraumatic Growth (Tedeschi, 1996) という研究が注目されてきている。つまり、喪失をネガティブなものとして捉え、喪失を経験する前を最良と考え元の状態に戻すという医学モデル的な考え方から、喪失を経験したことにより獲得したものに焦点を当てるという視点を移動させた考え方である。東村ら(2001)はこれを人間的成長(personal growth)とし、Deeken(1983)は人格的成長とした。一方、ペットロス経験をした子どもの両親の「子どもが育てる喜びと別れの悲しみ、豊かな情感を育て学びとっていった」「子どもに命の大切さを素直に感じてもらえた」「子どもにやさしさ・思いやりが育つ」という発言からも、ペットロス経験は、共感性の発達や生命の大切さを実感する機会を子ども達に与えている（濱野，2004）。以上から、子ども達がペットロスを経験することによって、生命観の育みや共感性の発達があると考えられた。本研究では、このような喪失経験により獲得したものを人格的発達とする。

文部科学省が、生命を大切にする気持ちを育てるために動物を用いた教育を推奨しているが、動物の死が子どもに与える影響についての実証的な研究は少なく、子どものペットロス経験による人格的発達に関する研究はほとんどない。また、幼稚園や保育園には園内にウサギなどの動物が飼育されているが、園内飼育動物が死んだ場合に、子ども達から動物の死を遠ざける傾向がある。保育士にその理由の聞き取りをしたところ、「子どもが死を受け入れられず立ち直れない」、「子どもがかわいそう」、「どう対応していいかわからない」というように、大人が先回りをして子どもたちから死を隠すということが考えられる。また、松井(1997)が、「死を日常生活から排除しようとする現代人の傾向は、悲しみのような否定的な心理体験をタブー視し、抑圧する心理と結びついている」と指摘しているように、大人達が、自らが死に触れたくない、動物の死に遭遇した子どもの対応ができないという理由

で、子どもから死を遠ざけていると考えられる。しかし、親密な対象の死の経験をすることは、生命の大切さを実感する重要な機会である。

以上から、本研究では、幼児のペットロス経験を調査することにより、ペットの死をどのように捉えているか、そのペットロス経験によりどのような心理的变化、特に生命に対する考え方の変化、または、どのような人格的発達があったかを明らかにする。

本中間報告の目的

本研究の予備調査として、幼児を対象とした動物の死に関する調査と、ペットロス経験者を対象とした調査を実施し、本調査の質問項目を作成することを目的とする。

具体的には、動物の死に関する調査で、幼児が日常的に関わっている園内飼育動物の死をどのように捉えているかに関する面接調査を行う。さらに、幼児と動植物との親密さについて、保育士に質問紙調査にて評定してもらう。以上から、幼児は死をどのように捉えているか、年齢による死の捉え方の差異について、さらに、他の動植物との親密さと死の経験の捉え方の関連性について検討する。以上の結果を分析することによって、本調査で行う幼児のペットロス経験に関する面接調査の質問項目を作成する。これを「動物の死に関する予備調査」とする。

また、ペットロス経験者を対象とした調査では、ペットロス経験をすることによって、どのような人格的発達があったかについて探索的に調査する。以上の結果を分析することによって、本調査で行う両親を対象とした質問紙調査の項目を作成する。これを「人格的発達に関する予備調査」とする。本調査では、この項目を用いて、幼児がペットロスを経験することによって、どのような人格的発達があったかについて両親に評定してもらう。

以上の2つの予備調査を分けて記述する。

I. 動物の死に関する予備調査

方 法

1. 調査協力者

3年間参与観察を行っている都内の保育園に協力を依頼し調査を行った。当園には、男児が34名、女児が25名の計55名通園している。また、各年齢クラスは、年少は19名で(48ヶ月齢～59ヶ月齢、平均月齢:53ヶ月齢)、年中は20名(60ヶ月齢～71ヶ月齢:平均月齢:64ヶ月齢)、年長は16名(70ヶ月齢～82ヶ月齢、平均月齢:77ヶ月齢)であった。全体の平均月年齢は、64.63ヶ月齢(SD=10.0)であった。

調査協力者は、当保育園に通い、約3ヶ月前に当園内で飼育していたハムスターの死を経験し、協力してくれた幼児10名であった(年長クラス8名、年少クラス2名:男児7名、女児3名)。平均月年齢は、70.6ヶ月(SD=10.0)であった。

2. 調査期間

2003 年 2 月～2003 年 3 月

3. 調査方法

幼児に対する面接調査と、所属するクラス担任の保育士に対する質問紙調査を行った。

4. 質問内容と回答方法

(1) 保育士への質問紙調査

1) 幼児の属性

クラス、年齢、性別、兄弟姉妹の構成、ペット飼育の有無

2) 「生き物との親密さ」

「幼児は、全ての動植物（生き物）に親しんでいる」の質問に対して、4段階評定法（とてもそう思う、ややそう思う、あまりそう思わない、全くそう思わない）で回答してもらった。この項目に関しては、所属クラス担任の保育士が評定する。

(2) 幼児への半構造化面接調査

「ハムスターはどうなったのか」、「そのときどう思ったのか」の質問に自由に話してもらった。

5. 分析方法

幼児は死をどのように捉えているか、年齢による死の捉え方について、さらに、他の動植物との親密さと死の経験の捉え方の関連性について質的に分析する。

結果と考察

各幼児の属性と、「生き物との親密さ」の回答、さらにその項目の年少、年長クラスの平均値と標準偏差を算出し、表 1 に示す。

表 1 幼児の属性と「生き物との親密さ」の回答

ケース	クラス	月齢	性別	兄弟姉妹の有無	ペットの有無	生き物との親密さ(回答)	生き物との親密さ(M, SD)
1	年長	78	男	弟 3 人	あり	2	2.8, 1.0
2	年長	80	女	弟 1 人, 妹 1 人	なし	2	2.8, 1.0
3	年長	73	男	姉 1 人	なし	2	2.8, 1.0
4	年長	74	男	兄 1 人	あり	4	2.8, 1.0
5	年長	71	男	姉 1 人	なし	3	2.8, 1.0
6	年長	81	女	弟 1 人	なし	4	2.8, 1.0
7	年長	72	女	姉 1 人	なし	4	2.8, 1.0
8	年長	71	男	なし	なし	2	2.8, 1.0
9	年少	50	男	なし	なし	2	2.4, 0.8
10	年少	56	男	妹 1 人	なし	2	2.4, 0.8

幼児のハムスターの死に関する面接調査の語りを表2に示す。

表2 動物の死に関する語り

ケース	死に関する語りの内容	死んだときの気持ち
1	ハムスターが死んで、埋めた。	回答なし
2	ハムスターが死んで広場にうめた。	回答なし
3	ハムスターが死んだ。いっぱい埋めたから分からない。やな気持ち。	嫌な気持ち
4	悲しかった。死んじゃったからここに戻ってこないから天国で遊んでねっていった。	悲しい
5	世話をしないと死んじゃうから。誰もやんなかったら死んじゃうし、汗かいて、暑い暑いって行って水も飲めないとのど渇く。	かわいそう
6	ハムスターが死んじゃって埋めたところに芽が出てきた。	回答なし
7	ハムスターが先生の手の中でびくびくってなってて、死にそうになってた。	回答なし
8	ハムスターは、おじちゃんになって死んだ。牛乳パックの箱に入れた。お花をいれて。悲しかった。	悲しい
9	かめは、おじいさん、天国から守ってくれてるかもしれないけど。	回答なし
10	うちのウサギもう死んじゃった。うちのウサギねえ、赤ちゃんぐらいにねえいたんだけど、でも直らない。ずっと、ずっと直らない。かわいそうかなと思った。ウサギが死んだあと消えちゃった。自分が消した。	回答なし

4名の幼児が、ハムスターが死んだときの状況を語っていた（ケース1, 2, 3, 7）。特に、ケース7の幼児は、死ぬ瞬間の状況を語っている。2名の幼児は、ハムスターの死から自分が経験したペットの死を想起して語っている（ケース9, 10）。3名の幼児は、死んだあとの世界（天国等）について語っている（ケース4, 6, 9）。4名の幼児は、おじいさんになったなど、死の原因について語っていた（ケース5, 8, 9, 10）。

以上、園内飼育動物として幼児が身近に接していたハムスターの死の経験に関する面接調査から、「死の場面状況」、「そのときの感情」、「死の原因」、「死後の推測」についての語りが見出された。また、ハムスターが死んだときの気持ちに関しては、10名中4名が悲しい等の否定的感情を語っており、6名は無回答であった。

一方、保育士の質問紙調査の結果、「生き物との親密さ」については、クラス平均値よりも生き物と親密であると保育士が判断した幼児は4名いた（ケース4, 5, 6, 7）。この4名は、死の状況、死の原因に関する詳しい語りや、死後について語っていた。このことから、保育士が生き物と親密であると考えた幼児は、動物の死に遭遇したときによく観察し、そこから様々なことを感じ取っていることが示唆された。また、ケース10では、「ウサギが死んだあと消えちゃった。自分が消した」という語りのように、死と自分を関連付けていた。これは、年長には見られない傾向であると考えられた。

今回は、10ケースと限られたデータであり、自由に語ってもらったため、幼児の死の語りを十分に捉えることができなかった。しかし、幼児が身近に接していた園内飼育動物の死を対象とすること

で、幼児は身近な出来事として捉えることができたと考えられた。以上の点を踏まえ、本調査では、先行研究も検討し、より構造化した面接調査を行う。

II. 人格的発達に関する予備調査

方 法

1. 調査協力者

関東地方、関西地方、東北地方に在住している犬または猫を喪失した経験のある飼い主 18 歳～68 歳（平均年齢 28.84 歳；SD=13.14；男性 38 名；女性 156 名）の 194 名を対象とした。犬を喪失した飼い主 147 名、猫を喪失した飼い主 47 名であった。何頭かのペットを亡くした経験のある飼い主には、一番最近亡くしたペットについて回答してもらった。

2. 調査期間

2006 年 2 月～2006 年 8 月

3. 測定方法

質問紙調査法にて調査を行った。

事前に行った予備調査の自由記述から喪失受容や喪失経験による人格的発達に関する 35 項目の質問項目を作成した。回答方法は、「非常にあてはまる」、「かなりあてはまる」、「ややあてはまる」、「あてはまらない」の 4 件法にて評定する。

4. 手続き

調査手続きとして以下の 2 通りの方法で行った。

①関東地方の 2 つの大学にて集団調査

②知人とその家族に依頼し郵送調査、または留置調査

回収率は約 60%であり、有効回答率は約 90%と高い確率であった。

5. 分析方法

分析の統計処理は、SPSS for Windows ver. 13.0 を使用し、35 項目の因子分析（主因子法：Promax 回転）を行った。

結果と考察

35 の質問項目を因子分析（主因子法）した結果、初期の固有値基準（1 以上）、因子間の固有値の差の相対的な大きさ、累積寄与率から 5 因子が妥当と判断した。続いて、因子分析（主因子法：Promax 回転）を実施し、因子負荷量が、.40 以下の低い項目である 7 項目を除外した。さらに、再度因子分析（主因子法：Promax 回転）を行った。さらに、因子負荷量絶対値が、.40 以下の低い項目である 4 項目を除外した。さらに、再度因子分析（主因子法：Promax 回転）を行い、.40 以上の因子を選択した。累積説明率は 50.1%であった。

結果、5 因子からなる 24 項目の尺度が作成された。因子分析の結果を表 3 に示す。

表 3 ペットロス経験による人格的発達因子分析結果

質問項目	第 1 因子	第 2 因子	第 3 因子	第 4 因子	第 5 因子	共通性
ペットを亡くす経験は、子どもの責任感の発達に役立つと思う	0.86	0.07	-0.17	0.02	0.01	0.48
ペットを亡くす経験は、子どもの情操教育に役立つと思う	0.84	0.12	-0.21	-0.02	-0.02	0.66
弱いものを気遣う気持ちが身についた	0.84	0.03	0.03	-0.09	0.03	0.68
命の大切さを学んだ	0.78	0.02	0.09	-0.06	0.03	0.66
「死」ということについて考えるようになった	0.71	-0.14	0.16	-0.09	-0.14	0.57
ペットを亡くす経験は、死を学ぶのによいと思う	0.64	0.14	-0.17	-0.11	-0.02	0.30
自分が成長した	0.51	-0.04	0.09	0.07	0.22	0.32
家族を亡くした人の気持ちが分かるようになった	0.50	-0.2	0.28	0.01	-0.04	0.50
ペットは、天国（あの世）で幸せにいらしていると思う	0.49	0.2	0.15	0.04	-0.08	0.56
ペットが亡くなったのは、しかたないと思う	0.07	0.85	-0.07	0.05	-0.12	0.57
ペットにとって、これでよかったと思う	0.14	0.77	-0.07	0.03	0.04	0.49
悔いはない	-0.01	0.72	0.13	0.04	0.05	0.65
ペットの人生は、きっと幸せだったと思う	0.05	0.63	0.21	0.11	0.13	0.54
支えてくれたのは、家族だと思う	0.08	0.01	0.66	0.05	-0.04	0.47
支えてくれたのは、友人だと思う	0.04	0.02	0.62	0.22	-0.12	0.43
支えてくれたのは、獣医師だと思う	-0.06	0.06	0.52	-0.23	0.11	0.37
支えてくれたのは、動物看護師だと思う	-0.11	0.07	0.47	-0.1	0.05	0.24
また次のペットを飼いたい	-0.02	0.16	-0.11	0.91	0.03	0.62
*ペットはもう飼いたくない	-0.19	0.06	0.08	0.65	0	0.60
次のペットを飼うときは、前よりきちんと飼いたい	0.12	-0.29	-0.03	0.48	-0.07	0.46
ペットを責任もって飼っていた	0.02	0.09	0.01	-0.03	0.73	0.29
ペットを飼っていたとき、世話はじゅうぶんしてあげた	-0.11	0.2	0.03	-0.06	0.71	0.33
*ペットのことはもう忘れた	0.10	-0.32	-0.16	0.11	0.44	0.74
ペットとの楽しい思い出を思い出す	0.30	-0.16	0.08	0.12	0.43	0.50
固有値	5.91	3.65	1.89	1.52	1.47	
因子寄与率 (%)	22.74	13.29	5.78	4.17	4.09	
累積寄与率 (%)	22.74	36.03	41.81	45.97	50.07	
α 係数 (Cronbach)	0.88	0.82	0.62	0.69	0.68	

回転法：Kaiser の正規化を伴う

Promax 回転法，因子負荷量.40 以上を選択*は逆転項目

作成された尺度から、人格的発達に関すると考えられる質問項目は、第 1 因子の 9 項目である。この 9 項目を本調査に適するように改定して使用する。

今後の計画

今回の予備調査 I では、50 ヶ月齢～81 ヶ月齢の幼児の動物の死の経験に関する調査を行った。そ

の結果から、「死の場面状況」、「そのときの感情」、「死の原因」、「死後の推測」についての語りが見出された。

一方、56ヶ月齢の幼児は、ウサギが死んで消失し、それは自分が消したと語り、死と自分を関連付けていた。これは、年長には見られない傾向であった。Speeceら(1984)は、子どもの死の概念の発達について、非可逆性(irreversibility)、生命機能の停止(nonfunctionality)、普遍性(universality)の3つの死の概念の要素を挙げて先行研究を論じ、5歳~7歳でこの3つの要素を理解するとしている。また、日本においても、中村(1994)が、この3つの死の概念の要素を用いて年齢区分別に調査を行い、5歳と6歳の間に変化があり、6~8歳で3つの死の概念を理解するとしている。以上の研究は、不特定多数の死を題材に行っている調査であった。このような研究方法は、条件は統制できるが、幼児が死を身近な出来事として捉え難いとも考えられる。一方、竹中ら(2004)は、絵本を用いた研究を行い、死の概念の獲得はもう少し早い時期であるとしている。このように、具体的な題材を用いることによって、年少の幼児にも分かりやすい質問になり想起しやすくと考えられる。本研究では、幼児が経験したペットの死を対象とすることによって、さらに、身近な出来事として想起しやすく、幼児の実体験を捉えることができると考えられる。

以上を踏まえ、本調査では、死の概念獲得に大きな変化がある年齢と考えられる、4歳0ヶ月~6歳11ヶ月の幼児を対象とする。死の概念については、Speeceら(1984)の非可逆性(irreversibility)、生命機能の停止(nonfunctionality)、普遍性(universality)の3つの要素について調査を行う。3つの要素の質問に関しては、中村(1994)の死の概念に関する質問項目を改定して使用する。また、死に関しては、予備調査Iで抽出された「死の場面状況」、「そのときの感情」、「死の原因」、「死後の推測」に焦点を当てて検討する。

一方、人格的発達に関しては、愛着を持ってコンパニオンアニマル(ペット)を飼育することは喪失後の悲哀を強くするが、喪失経験による人格的発達に影響を及ぼすことが明らかにされている(濱野, 2007)ことから、幼児と生前のペットとの関係についても測定することとした。幼児とペットの関係に関する質問は、幼児と園内飼育動物の関係に関する質問項目(濱野; 関根, 2005)の一部を改定して使用する。幼児のペットロス経験による人格的発達に関しては、予備調査IIから得られた9項目を改定したものをを用いる。

本調査の目的

予備調査の結果から、園内飼育動物よりもさらに親密と考えられるペットの死について調査を行うこととした。具体的には、家庭内で1年以内にペットの死を経験した幼児を対象に面接調査を行う。この調査により、幼児はペットの死をどのように理解しているか、その経験からどのような心理的変化、特に生命に対する考え方に変化があったか、さらに喪失経験による人格的発達を明らかにする。

幼児の死の概念を明らかにする点では、先行研究の不特定対象の「死」を扱うのと比較して、幼児が親近感を抱いているペットを対象とすることにより、幼児が死を身近に起こった出来事として捉えるため想起しやすく豊富なデータを得られると考えられる。

一方、ペットロス経験による人格的発達を明らかにする点では、実践的研究として意味があると考ええる。また、幼児と生前のペットとの関係について調査することにより、ペットロス経験による人格的発達をより明らかにできるものと考えられる。

方 法

1. 調査協力者

最近1年以内に、家庭内でペットの死を経験した4歳0ヶ月～6歳11ヶ月の幼児。

2. 調査期間

2007年3月～2007年7月

3. 測定方法

幼児を対象とした半構造化面接調査と、その両親を対象とした質問紙調査を行う。

4. 調査内容

(1) 幼児とペットとの関係に関する面接調査項目

*質問にあてはまる場合、各質問項目の右記の質問を行う。

- 1) そのペットはどんなペットだったのか
- 2) ペットに触ったり、抱っこしたことがあったか、なかったか→どういう気持ちになったか
- 3) ペットのことは好きだったか、嫌いだったか→好き/嫌いなのはどうしてか
- 4) ペットにエサをあげたり、世話をしたりすることはあるか→好き/嫌いなのはどうしてか
- 5) ペットと遊んだことがあるか→何をして遊んだか。どう思ったか、どう感じたか
- 6) おかあさんやおとうさんと、ペットのお話をしていたか→どんなお話をしたか
- 7) ペットはいつもどんなことを考えていたと思うのか
- 8) ペットとお話したことがあったか→どういうお話をしたのか

上記の2)～8)は幼児と園内飼育動物との関係の項目(濱野;関根, 2005)の改訂版である

(2) ペットロスに関する面接調査項目

「そのペットはどうしたのか」について自由に語ってもらう。

死に関する語りがある場合は以下の点に留意して面接を行う。質問の例を以下に挙げる。

- 1) 死の場面状況に関するもの 例) その時どうしたのか
- 2) そのときの感情に関するもの 例) その時どう思ったか
- 3) 死の原因 例) どうして死んだのか
- 4) 死の概念に関する質問(中村, 1994)の改定版
 - ① そのペットは生き返るか
 - ② そのペットのように誰でも死ぬのか
 - ③ そのペットは見たり聞いたり感じたりできるのか
- 5) 死後の推測 例) そのペットは今どうしているのか
- 6) その他

ペットが死んだことに対して今はどう思っているのか

(3) 幼児のペットロス経験に関する両親に対する質問紙調査項目

- 1) 子どもの属性とペットの属性
- 2) 子どもとそのペットの関係に関する項目
- 3) 人格的発達に関する項目 (予備調査Ⅱの9項目の改訂版)
 - ① ペットを亡くす経験は、子どもの責任感の発達に役立ったと思う
 - ② ペットを亡くす経験は、子どもの情操教育に役立ったと思う
 - ③ 弱いものを気遣う気持ちが身についた
 - ④ 命の大切さを学んだ
 - ⑤ 「死」ということについて考えるようになった
 - ⑥ ペットを亡くす経験は、死を学ぶのによいと思う
 - ⑦ 子どもは成長した
 - ⑧ 家族を亡くした人の気持ちが分かるようになった
 - ⑨ 子どもは、ペットは天国で幸せに暮らしていると思っている

5. 分析方法

幼児の面接、両親の質問紙調査の結果を分析資料として、幼児のペットの死の理解度、ペットロス経験による人格的発達に関して検討する。さらに、幼児のペットへの愛着と死の理解度、人格的発達との関連について検討する。死の概念に関しては、年齢による差異、先行研究との比較を行う。

今後、以上の本調査を実施する。

引用・参考文献

- Deeken, A.(1983). 特集日本人の死生観・悲嘆のプロセスを通じての人格的成長. *看護展望*, 8 (10), 881-885.
- 濱野佐代子. (2003). 人とコンパニオンアニマル (犬) の愛着尺度—愛着尺度作成と尺度得点による愛着差異の検討—. *白百合女子大学発達臨床センター紀要*, 6, 26-35.
- 濱野佐代子. (2004). コンパニオンアニマル (犬) 喪失後の飼主の心理過程. *アニマル・ナーシング*, 9 (1), 58-62.
- 濱野佐代子・関根和生. (2005). 幼児と園内飼育動物の関わり—園内動物飼育による幼児の社会性の発達への影響—. *どうぶつと人*, 12, 46-53.
- 濱野佐代子. (2007). コンパニオンアニマルが人に与える影響—愛着と喪失を中心に—. 博士論文. 白百合女子大学.
- 東村奈緒美・坂口幸弘・柏木哲夫. (2001). 死別経験による遺族の人的成長. *死の臨床*, 24(1), 69-74.
- 松本勝信・山崎亜紀穂. (2003). 動物の死に対する児童の概念—低・中・高学年の発達差と理科のカリキュラム. *大阪教育大学理科教育研究年報*, 27, 37-48.

- 松本勝信. (2004). 動物の死に対する児童の概念(II): 低・中・高学年の発達差と理科のカリキュラム. *日本理科教育学会全国大会要項*, 54, 291.
- Nagy, M.(1948).The Child's theories concerning death *Journal of Genetic Psychology*, 73,3-27.
- 仲村照子. (1994). 子どもの死の概念. *発達心理学研究*, 5 (1), 61-71.
- Park, C.L., Cohen, L.H., &Murch, R.L.(1996).Assessment and Prediction of Stress-Related Growth, *Journal of Personality*, 64(1), 71-105.
- 坂田和子・牧正興. (2005). Death Education Program の導入時期に関する検討. *福岡女学院大学紀要*, 6, 23-27.
- Speece, M. W., Brent, S.B.(1984).Children's understanding of death : A review of three components of a death concept, *Child Development*, 55,1671-1686.
- 竹中和子・藤田アヤ・尾前優子. (2004). 幼児の死の概念, 呉大学看護学統合研究, 5(2), 24-30.
- 谷島弘仁. (1993). 児童の生物概念の発達に関する文献的研究. *科学教育研究*, 17, 183-188.
- Tedeschi, R.G., & Calhoun, L.G.(1996). The Posttraumatic Growth Inventory : Measuring the Positive Legacy of Trauma. *Journal of Traumatic Stress*, 9(3), 455-471.

